

したものとおあわせ10種の異なる『盤王大歌』を対照させることにより、ベトナムのヤオ族の『盤王大歌』の原型(プロトタイプ)を再構成することに繋がると考えている。さらに中国及びタイの調査で撮影した『盤王大歌』に加え、バイエルン州立図書館、米国議会図書館及びオックスフォードボードレアン図書館で撮影した異本との対校も進めることで、『盤王大歌』の系譜も明らかにすることになると確信している。

この取り組みは、漢字を理解できる日本人だからこそ、可能であると思っている。いずれにせよ中国、ベトナム、タイに分散居住しながら同様の漢字文書を使用し、同様の儀礼を行なっているヤオ族だが、程度の差こそあれ、漢字文書とその読誦詠唱法という極めて複雑な儀礼知識の伝承と後継者育成に課題を抱えているといえる。ヤオ



ベトナムラオカイ省ヤオ族風景

族の儀礼知識の価値を評価し、世界人類の文化資源として認知を広げ今後も継承活用がされるために、何らかの貢献ができるように研究を続けていきたいと考えている。

(所員 経営学部教授)



韓国済州道の水資源を探って

李 貞和

2016年9月5日(月)から9月8日(木)にかけて、韓国の済州道(島)を訪問した。調査の目的は、「火山島である済州道の水資源を調べるため」である。調査地域として、済州道の済州市、西帰浦市(ソギポ市)であり、調査・訪問先として、9月5日(月)：①済州ハンラ(漢拏)大学の「水資源問題」セミナー、9月6日(火)：②西帰浦市の水資源地の一つであり、天然記念物に指定された「安德(アンドク)渓谷」の踏査、9月7日(水)：③最初の済州道の水資源遺跡地を見学、④済州道の国立済州大学を訪問(済州道の水資源研究団・団長であるヤン・ソング教授と意見交換)、⑤済州港見学、9月8日(木)：⑥三多水(生水製品名)工場見学した。

韓国の南西部に位置している済州道(チェジュド：正式な名称は済州特別自治道である)は、人口が約64万人で、アジアのハワイと呼ばれるという火山島で、2007年には韓国では初めて世界自然遺産として登録された。



済州ハンラ大学の「水質問題」セミナー

このように自然環境が美しいことで有名な済州道は、生活用水の不足で1970年代まで女性達は重い水汲み壺「ムルホボク」を背中にこの壺を担いで水の湧き出る



安德渓谷

海岸添いまで出かけたという(写真参照)。今回の済州道水資源の探査は、個人的には「水プロジェクト」の研究テーマ「韓国の水ビジネス」に関連して「サムダス生水」工場を見学と済州道水資源専門者にインタビューするのが目的であった。

9月5日(月)、無事に済州空港に到着しホテルへ向かった。ホテルまでいくマイクロバスのなかから見えて済州市内は、想像したより高いビルや車が多かったので少々びっくりした。宿は新済州市(済州市は新済州市と旧済州市で分かれている)の中心に位置している今回の訪問先に近いところにある小奇麗なホテルだった。午後4時頃に済州ハンラ大学の崔ソクボム先生が迎えに来て済州ハンラ大学のセミナーに参加した。本セミナーで、日本側は水資源問題(9月5日)、中国と韓国側は物流ロジスティクスと環境(9月6日)について発表された。



濟州島の水資源遺跡地

9月6日(火)、済州市内から車で1時間の距離に位置している安徳(アントク)溪谷の踏査に赴いた。安徳(アントク)溪谷は西帰浦市安徳面甘山里に位置し西帰浦市の水資源のひとつである。

里長との待ち合わせ場所である甘山里の面事務所では、職員のミス・カンが約束時間より朝早く訪ねた日本の訪問者達を明るく親切に接してくれた。午前10時過ぎに甘山里の里長のカン・ソクジョン氏と安徳面の青年会のカン・ムンス氏の案内で安徳溪谷を3時間ほど踏査した。カン・ソクジョン里長は、蜜柑農園を営みながら甘山里の里長を務めていて「私の先祖は済州道に島流しに来た流配人」だと笑いながら語ってくれた。大昔、流し島でもあった済州道には、流配人のほとんどは今時の言葉で言えば「高級官僚の政治犯」である。そう意味でカン・ソクジョン里長の先祖様は貴族には間違いないと思う。

もう一人の方のカン・ムンス氏は、蜜柑農園の仕事を関わりながら自然生態環境問題や安徳農業協同組合の理事で将来に西帰浦市民俗展示館を開館するために努力していた。

ちなみに面事務所のミス・カンとカン里長、カン理事は親戚で、この町はカン氏が多いといわれた。

安徳溪谷の自然生態の天然記念物に指定されるまでの過程や所々の湧水泉などを案内していただいた。溪



重い水み壺

【出所：<http://jejucoming.tistory.com/24>】

谷は、火山から噴出した溶岩や岩石によって形成され美しい景観であった火山の成り立ちや噴火、など基礎的な説明から始まり、専門用語も多く理解し難い内容もあったが、韓国人として世界的に知られている済州道について色々なことを知ることができ興味深かった。

帰りの道は、済州の伝統的な家屋を見たくて海岸通りを走ってもらったが、海岸の通りは、高級リゾート建物がずらりと立っていた。日本とのつながりを示す記念碑などあったが伝統家屋はすでになくなって、帰国日に民俗博物館で見ることができた。

9月7日(水)、午前中は最初の済州道の水資源遺跡地と水広報館を見学し、済州道の水資源の発達過程について参考にすることが出来た。午後には、済州大学の許・コンソク先生の案内で済州水資源研究者であるヤン・ソング教授を訪問した。ヤン先生は、済州道水資源研究団の団長、環境学会会長などを就いていた水資源や自然環境の研究者で韓国では知られている方である。何より嬉しかったのは、ヤン先生は日本の東京大学に留学した経験があり、非常に日本語が流暢な方で、日本についてよく理解してくれていた。和気藹々の雰囲気で行先先生方々と日本語でアジアの水問題やヤン先生から済州道の水資源生成と今後の課題についての話をかわした1時間を超え、済州道の水資源に関する内容のDVDの視聴などで3時間近い熱い意見交換を交わすことができた。

その後、済州港を見学し、海運港湾課のクァク・ジョンジュ(海洋水産部所属)と国際ターミナルのチーム長から現状の説明をうけた。クルーズ船で中国からの旅客者は、一日に3千名も寄港することもあり、パスポート規制緩和政策で起きた問題や新ターミナル建設計画について説明を受けた。

9月8日(木)、午前中に、韓国国内で水産業企業として一位を占めている「済州三多水生水」工場を訪問した。済州道は、そもそも生活用水は溜まった雨水が湧水しか利用できないため、非常に生活水の問題で困難したため、その問題を解決するために「水資源に関する研究」は1921年代から現在も続いているという。工場視察では、三多水生水のくみ上げや、ボトリング状況など、地下水の状況の説明を受けた。

四日間の短い期間の調査ではあるが、反省する部分も実りも多い出張だった。

今後、今回の出張調査から得た済州道の水資源の問題を踏まえて、地下水を利用して「水ビジネス」で成功した「三多水」企業について検討し、済州道の「水資源の課題」について考えてみたいと強く感じた。

(所員 経営学部特任准教授)